

樺太（サハリン）

小林市雄さん

私は東京生まれ樺太^{からふと}育ち。大正15年6月、大工職で先に渡樺した父の後を追って、母に連れられて大泊⁽¹⁾から落合⁽¹⁾まで行って、ポンポン発動機船⁽²⁾で知取町⁽¹⁾に着いたが、港と言ってもまた浮橋に乗って上陸するが、すっかり船酔いし母子共に上陸板からザンブリ海上へ。6月で寒いかどうか忘れたが、お菓子のはいった白い柳行李と白い帽子が浮かんでいたのが、今でもはっきりと頭に残っている。

知取町^{しるとる}は、王子製紙工場が豊富な製紙原料の松を使って、新聞用紙を製造していた。⁽¹⁾敷香^{しすか}、知取^{しるとる}、豊原^{とよはら}、真岡^{まおか}に工場があった。

知取川^{しるとる}でも、奥地で伐採した松を水流を使って工場まで流す。冬に切った松を上流に組んでおいて春先の氷がとける頃、人夫が命がけで組んだ木の一部をはずすと、12尺から20尺の松の木が縦になり横になり物凄い状況で流れ下る、天下の絶景であった。この川は春になると、鮭^{さけ}、鱒^{ます}が川を真っ黒になって登ってくる。すると人々は長い竹の先にクサリ状の針金を上流から下流に下って引くと面白いように魚が引っかかってくる。

筋子^{しんこ}といって朝捕った卵を醤油^{しょうゆ}に漬けて晩に食べると、こんなにうまい物はない。身は、すぐ食べますが、野菜と漬けて冬の副食となる。これは密漁であるから時々警官が数人取り締まりにやってくる。捕まると、ぶんぐら⁽³⁾れ一晩ブタ箱入りとなる。



夏になると冷たい川でも泳ぐ人が居たが、時々心臓マヒかなんかで死ぬ人もでる。また、町は10月頃から雪が降り、根雪⁽⁴⁾になるのは12月26日頃になる。この頃になる

と、あちこちペタン、ペタンと餅をつく音が聞こえてくる。で、つき終わったら、すぐ外に出しておくのと凍って夕方取り入れると凍り餅となり、火にあぶると、つきたてのようになりうまい。この頃になると猛吹雪となり、一寸先も見えなくなり、通勤で隣りを歩く人が急に見えなくなる。仲間と一緒に探しても見つからない。春に雪がとけてくると溝の中から見つかる。樺太最北の(オハ)には半官・半民の石油工場があった。21歳になったら青年訓練所で兵隊訓練を受け帰隊中、市役所の職員が召集令状(赤紙)を持ってきて手渡してくれた(宗谷要塞重砲兵連隊に入隊せよ宿泊地は菅野旅館とす)(北海道稚内)。隣りに連隊本部があった。すぐに入隊、そこに自分の名前を書いた兵装があった。昔の砲兵は大きな人ばかりだったか、皆ダブダブ帽子、あげあげズボンを引きづって、8里の行軍つらかった。

遂に第二中隊のある宗谷岬についた。早速訓練が始まる。番号と号令がかかる。1, 2, 3, 4, 5, 6, 7...と終わったらぶんなぐられた。お前らそんなに死にたしか、死地に行きたいかと。何の事かさっぱり判らない。4はヨシ、7はナナと呼ぶのは後で判ったが、叩かれ痛い思いで覚えたのを忘れない。

かくて終戦となり、中隊命令により樺太出身兵17名だけ、古兵さんの車に乗りこんだが目的地の本斗まで行かず途中でおろされ、豊原まで歩いた。日本海方面に帰った兵15人は、東部から攻めてきたソ連兵に皆殺しになった。運命の差は紙一重。

これが判ったのは10数年後、年金について調査のため内閣府に行って、調査の結果判った。私が樺太から引揚げたのは、昭和23年6月である。資料は何もない。大泊でソ連兵により日本人の物は全部差し押さえられた。

-
- 1 大泊・落合・知取・敷香・豊原・真岡・本斗...日本の領地下において樺太に存在した町。
 - 2 ポンポン発動船...炎玉エンジンを搭載した小型動力船。リズムカルな独特の爆音を立てて航行することから「ポンポン船」と呼ばれた。
 - 3 ブタ箱...夏の夜、蚊や害虫を防ぐため、四隅を吊って寝床を覆う道具。
 - 4 根雪...雪解けの時期まで残る積雪下方の雪。
 - 5 半官・半民...政府と民間とが共同で出資し、事業を営むこと。
 - 6 要塞...戦略上の重要地点に設けられる、主に防衛を目的とした軍事施設。

- 7 重砲兵...長距離の射撃が可能な口径の大きい大砲で敵を砲撃するのが任務とする兵。
- 8 古兵...古くからいる現役の兵士。